

固有名詞の普通名詞化 覚書

清水 克 祐

(1)

詩人 James Kirkup のエッセイ集 *Speaking Personally*¹⁾に、姓や名、あだなをを扱ったエッセイ“*What's In a Name?*”がある。その最後の所で、詩人は *What's in a name?* と自問し、そしてみずから答えを出している。

Everything! And nothing!

すべてであり、また無である。

これは詩人らしい慧眼と言えよう。しかし詩人たちはこのあとシェイクスピアの『ロメオとジュリエット』からの文句「われわれがバラと呼ぶものは、ほかの名前に変わっても甘い香りは変わるまい」

That which we call a rose

By any other name would smell as sweet.

を引用しつつ、「名前はいかに美しくまたいかにみにくくても、符号にしかすぎない」と言っている。

これを言語学的にまとめてみると、固有名詞は、普通名詞とちがって、単に個物に直結している。すなわち固有名詞は内包的意味を持っていない、²⁾ということになる。

その通りであるが、それだけでは固有名詞がその言語社会において果たす機能と意味を十分に明らかにしてはいない、と思われる。

この問題に関して、OEDにおける proper name の定義と解説が、重要な示唆を与えてくれている。OED では、固有名詞内には内包的意味

はないとしつつも、そう名付けられた個物の属性から、ときには内包的意味を受けることがあり、その固有名詞が普通名詞として用いられる、と明瞭に指摘している。

ここまでくると、Kirkup が詩人の直観で言い切った Everything! And nothing! の意味が氷解する。固有名詞はなんの意味もないものであるが、ときには意味を持って普通名詞として転用される、と。

固有名詞の普通名詞化の事象は、従来の学校方法でも扱われてきている。ところが、通例、He is a Newton. (彼はニュートンのような人だ) のような例文が提示され、固有名詞の前に不定冠詞が来るのが、日本語の場合とちがって、英語の文法のひとつであることが教えられる。

形態的には、その通りであるが、それではその固有名詞が普通名詞に転用された場合に生ずる内包的意味が見落されている。

従来の英語教育においても、この点は看過されてきた。せめて学生に例文を提示するにしても、

Seki Kowa is sometimes called the Newton of Japan.³⁾ (関孝和はときには日本のニュートンといわれる)

のような、有意味の文を提示したいものである。関孝和とニュートンのそれぞれの属性がある点で合致して、この比喩的表現がなるほど首肯させるものがある。

固有名詞が普通名詞に転化したというのは、英語なら英語ということばの生命の血と化した、と言ってよいであろう。その普通名詞化した単語の中には強力なる文化的背景がある。こういう「ことばのイメージ」を理解しなくては、英文解釈をしても、皮相的な解釈に終わってしまうし、英米文学の作品を鑑賞するにしても、浅薄な印象で終わってしまう恐れがある。

固有名詞の普通名詞化についての研究は、従来もないわけではなかった。英語学者 Ernest Weekley⁴⁾ (1865-1954) や Eric Partridge⁵⁾ (1894-1980) などのすぐれた業績もあるが、英語学の研究全体から見ると――

フィロロジーとリングイスティックスの両方をあわせても——これらの研究はまだ少数派である。しかし、渡部昇一が「イメージの考古学」⁶⁾として新しい語源学を提唱し実践しているのと同じように、「イメージの化石」として固有名詞の普通名詞化の研究を確立する必要があると思われる。

ことばを「イメージの化石」としてとらえるとらえ方は、決して新しいものではない。先にあげた OED の編集の必要性を学界内外によびかけた推進役の英語学者 Richard C. Trench⁹⁾ (1807-86) は、ことばを、すなわち words を “Fossil poetry” (化石となった詩) としてとらえ、その観点からの研究を説いている。

われわれもこの原点に立ちもどり、ことばを見直し、英語研究と教育の座標軸を構築せねばならない。

(2)

日本語にも、固有名詞の普通名詞化の現象はある。その内包的意味に焦点を当てつつレキシコン (小語い集) を編集した先達に幸田露伴⁷⁾がいる。

露伴は明治 33 年 6 月『当流人名辞書』を表わし、155 語の語いを収録した。その中には権助、三助、雲助、源五郎、五郎助、兵六、紺屋太郎、坂東太郎、筑紫二郎、四国二郎、などが含まれている。

これは注目すべき指摘である。固有名詞の普通名詞化は、日本語にあっては、地名に由来するものが圧倒的に多く、人名に由来するものは少ない。その少ない例の収集であるからである。

これに反し、英語においては、地名に由来するものはもちろん、人名に由来するものも多い。安原博純⁸⁾はこう言っている。

例えば Cape Kennedy, ケネディ空港、フルブライト委員会など日本では考えられない。有名な大学 Harvard, Stanford, Vanderbilt など は創設者の名であり、日本ならさしずめ大隈大学(早稲田)、福沢大学

(慶応)、成瀬女子大学(日本女子大学)とするところである。しかし日本では一般に個人名を出すことを控える傾向が強い。これは日本人の非個人主義的な集団指向性の反映である。

このようなわけで、英語における固有名詞、とくに人名の、普通名詞化は、英語の特徴を示すパラメーターとなっている。

この一例として、男の名 Jack を取り上げてみよう。フランス語 Jacques に相当するこの名は英語で実によく用いられているが、それが普通名詞化して Jack and Jill (若い男と女) と古来英語の童謡の中で歌われ、ことわざにも多く登場している。

さらに、複合語の第一構成要素として、jackhammer (手持ちさく岩機)、jackshaft(ジャックシャフト)、jackknife(ジャックナイフ)、jackstraw(わら人形)、jacktar(水兵、船乗り)、jackass(のろま)、jackdaw(小ガラス)、jackstone (お手玉) など、と重用されている。

また複合語の第二構成要素として、applejack (リンゴブランデー)、bootjack(長靴のくつぬぎ器)、smokejack(焼ぐし回し)、blackjack(小こん棒、ビールの大ジョッキ; 黒旗; 黒いカシの木)、cheapjack (安売りの商人)、Cousin Jack (コンウォール人)、crackerjack (ずばぬけていいもの・人)、flapjack(ホットケーキの一種; コンパクト)、man jack (個人)、steeplejack (尖塔職人)、lumberjack (きこり) など。

Ernest Weekley⁹⁾はつとに訴えている。これらのjack-または-jackの複合語はきわめて英語的であるが、どうしてこういう語形成ができるのか、その仕組みを私よりあとの言語学者は解明して欲しい、と。Weekleyのこの希望は、現在まで、かなえられていないようである。これは Jack だけに限らない。

筆者が学生のころ、朝鮮戦争で米軍は対戦車砲として一種のロケット砲「オネストジョン」(直訳、まじめ人間) Honest John を導入したが、その戦場での活躍は別として、われわれはその naming にびっくりした

ものであった。

(3)

固有名詞の普通名詞化の例として、こどもでも知っている例に、サンドイッチ sandwich がある。かけ勝負に夢中になったあまり、この簡便な食べ物を考えついたサンドイッチ伯 John Montagu, the Fourth Earl of Sandwich (1718-92) は幸いなるかな。彼の名は英語ということば、あるいは日本語ということばがこの世から消えてなくなる限り、永遠に存続するであろう。

このサンドイッチ伯の名がハワイ諸島の旧名 the Sandwich Islands と関係があると知ると、ますますこの人物がおもしろくなる。この貴族は、今の「海軍大臣」に当る要職にあった人で、米国独立戦争で英海軍がみじめな敗北を喫したのも、このようなバクチ好きの人が頭(かしら)であったからだ、との説もあるくらいである。だが、彼の功績のひとつに、キャプテン・クックを世界探険の旅に出させ、ハワイを発見(?)させたことがあげられる。だからその旧名があった。

植物に Guernsey lily というのがある。最新刊の研究社大英和辞典⁵⁾には、鮮紅色の繖(さん)形花をつける球根植物 (*Nirene sarniensis*) (アフリカ南部原産で、Guernsey 島に帰化)、と説明がある。ガーンジー島はイギリス海峡にある英国の島。その島に帰化した植物であることはわかるが、それが何であるかズバリ知りたいところでた。小学館ランダムハウス大英和辞典には、ヒメヒガンバナ属の球根植物、とある。

OED を見ると、a? Japanese or S. African plant と出ている。研究社はどうして OED に? マーク付きながら出ているこの日本起原説をカットしたのか、その理由を知りたいところである。OED には、1664 年の例文として、ガーンジーリリは日本のスイセンである、があるし、1838 年のペニ百科事典からの引用、「この植物は日本原産である」をのせている。これらの説は植物学的に取るにたらないものなのであろうか。

Isaac Taylor¹⁰⁾によると、この植物の名には奇妙な歴史が秘められている、という。オランダの植物学者で旅行家である Kämpfer がこの花を日本で見つけて、その球根を持ち帰った。ところがその船がガーンジー島沖合で難破し、球根の一部がこの島に流れついて、芽を出し、美しい花を咲かせるようになった、というのである。

OED にも、1659 年ごろ、日本からの船が難破して、打ち上げられた球根がこの島で育った、の趣旨の例文 (1895) が出ている。

ヒメヒガンバナは別名まんじゅしゃげというのであれば、長崎とも大いに関係がある。Guernsey lily の日本起原説を無視するわけにはいかないうである。

最後にひとつ、COD の 6 版 (1976) に新語として出て、研究社大英和にも出ている satsuma について触れておく。要するに、今のイギリス人は (ウンシュウ) ミカンのことをしきりに satsuma と言っており、それが辞典に記述されるようになったのであるが、ミカンのことを satsuma と言われると、聞く日本人のほうがびっくりする。温州密柑は中国の地名「温州」と無関係だそうだが、この satsuma は鹿児島原産と研究社大英和にあるのはいかがなものか。輸出地としての名が取り入れられたものと推測されるが、他の事情もからみ合っているかもしれない。

COD も研究社大英和も satsuma については、最初に薩摩焼きを掲げている。研究社には「日本の最も有名な製品としてヨーロッパで誤って見られてきた磁器の一種」との解説があるのは有益。Encyclopedia Britannica (1980) には、19 世紀に、輸出用にいわゆる Satsuma pottery が製造されたが、薩摩で作られたのではなく、京都で作られ、東京で仕上げされたけばけばしい質の悪いものである、の記述がある。

固有名詞の普通名詞化にもいろいろなファクターがあって注意を要するが、かえってそこにその語のもつ文化史的背景がうかがえる。

Notes

- 1) James Kirkup, *Speaking Personally* (英潮社 昭和56年1月10日発行)
- 2) 『国語学研究事典』(明治書院)
- 3) S. H. Hollingsdale, *Electronic Computers*(Penguin, 1965)
- 4) Ernest Weekley, *The Romance of Words* (1912); *The Romance of Names* (1914)
- 5) Eric Partridge, *The World of Words* (1938)
- 6) Richard C. Trench, *The Study of Words* (Redfield, 1855)
- 7) 福本和夫『私の辞書論』(河出書房新社 昭和52年)
- 8) 安原博純(『女子大通信』No.368 79年9月1日号)
- 9) 前掲の *The Romance of Words*
- 10) Isaac Taylor, *Words & Places* (J. M. Dent & Sons, 1911)